

*若芽通信は、教師の仕事とそのやりがいや、在学生の取り組みなどを、ご家庭と学生に紹介するニュースレターです(年2回発行予定)



教職の魅力と学生へのメッセージ(内河水穂子先生より)

第2号の巻頭では、本学教育学部附属教育実践センターの内河水穂子教授にお話を伺いました。中学校社会科、特別支援学校教諭、教頭、校長、と多様なお仕事をされてきた立場から、教職の魅力と埼大生へのエールを語っていただきました。

◆語り手:内河水穂子(埼玉大学教育学部附属教育実践センター教授、特別支援教育)

◆聞き手・構成:本橋幸康(教育学部言語文化専修国語分野准教授)

感動と創造性のある教師の仕事

———教職の魅力は何でしょうか。

内河:教職は、感動と創造性のある仕事です。子どものやった！できた！という場面や、学校行事をクラスでやり遂げた達成感や感動は、本当にうれしいものです。

若いころ、私が中学校の教員だった時に、子どもたちと一丸となって練習して体育祭で優勝してみんなで大喜びしたことがありました。その時は、なんと生徒たちが私を胴上げまでしてくれてびっくりしましたが、子どもたちと一生懸命に取り組み、感動を共有できたことの喜びを感じました。

特別支援学校では、学生服のボタンを一人で絞められなかった子が毎日毎日繰り返して一人のできるようになる瞬間がありました。小さなことかもしれませんが、子どもが時間をかけて全力で向き合う姿や成長をみられること、やった！できた！という喜びを本人、そして保護者を含めてみんなで共有できるのは、教職ならではの、と思います。

また、私は、よい授業を目指して、教材作成や授業の進め方等を工夫して、授業づくりに夢中になって、取りくんできました。特に附属特別支援学校では、授業をよりよくしようと先生方みんなで教材研究や授業づくりについて話し合ったり、研究に取

り組んだりしていました。よい授業をすると子どもの反応があるので手ごたえが感じられます。授業づくりは、創造性のある仕事だと思います。このように、創造性と感動のある教職は、やりがいの高い仕事だと感じています。



▲ 先生の研究室でお話を伺いました(写真:橋本廉士)

さまざまな立場から地域の学校教育に携わる

———内河先生がこれまでに教員の仕事として経験されたことを教えてください。

内河:私は、中学校の社会科教員、肢体不自由や知的障害の特

別支援学校教員、教育委員会で特別支援教育の仕事、小学校・特別支援学校の教頭・校長を経験しました。この多様な経験は、人生を豊かにしてくれたと思います。このように、教員は、一つの仕事に専念することもできますが、多様な経験ができることも魅力の一つだと思います。

教育委員会では、特別支援学校の学校づくりの事に携わり、建物の間取りから教育課程の作成、備品や教材購入等の学習環境の整備、何から何までを考えることで、改めて学校を支える地域や社会とのつながり、学校の役割などに気が付かされました。大変な仕事でしたが、校舎ができあがり、子どもたちが学びにやってくる様子をみたときには達成感があり、教員という立場とはまた違った立場から学校の役割や教員の仕事を見つめなおすことができました。

さいたま市全体の特別教育支援をよくするという仕事にも携わりました。学校の先生は目の前の子どものために授業をよくする視点、校長になったときには子ども、保護者、先生を含めて学校全体をよくする視点、教育委員会ではさいたま市全体をよくする視点というように、年齢を重ねて経験を積むことでさらに広い視点をもって仕事に取り組むことができるようになって、自分自身の成長にもつながりました。またそうした視点の広がりを先生方と共有して教育の充実に取り組んできました。



▲ 教育学部棟の屋上で

埼玉大学生へのエール

——— 埼玉大学教育学部の学生のイメージを教えてください。

内河: 誠実で温かい印象をもっています。やるときはしっかりやる力、姿勢があり、教員などのヒューマンサポートをする仕事につくにふさわしい資質をもっている学生が多いと思います。学

校の管理職の立場としてみたときにも、埼玉大学教育学部の学生は、一つ一つのものごとにしっかり取り組んでくれる力や姿勢があり信頼できる学生が多かったと感じていました。教員になるという同じ志をもった友達と一緒に頑張れたという学生の声も聞きました。こうした学生が集まっているということは本学の教育学部の魅力かと思います。

——— 教員を目指すにあたって、学生時代に取り組んで欲しいことについて教えてください。

内河: はい。一つめは、実際に子どもと関わることや、学校現場を見ることです。私の担当する教職入門Ⅰでは、希望者に学校参観を実施しています。また、学校フィールド・スタディーでは、学校現場で体験活動をしています。私自身も、学校見学やボランティアをしたことは、教員採用選考や採用後の仕事に大変役立ちました。

私が学生だったときには、ボランティアを募集していないところでもかかわらせてください！と率先して学びの場を得ていました。社会科の教員だったときには、いろいろなところに旅行にいったことも授業をするときに役立ちました。こうした経験は、働くときにどこかで生きてきますので、学生のみなさんには、今しかできない体験に挑戦してほしいですね。

二つめは、教員採用選考に向けて、本学の教職支援の取り組みを活用し、教職キャリア形成科目の受講をすることです。これらは、私を含めた小・中・高・特別支援学校の経験のある教員が行っており、実践的な内容になっていますので、このような機会を積極的に活用してほしいと思います。

——— 貴重なお話をありがとうございました。

内河: ありがとうございました。最後に、教職大学院では、学部を卒業した院生と現職教員の院生が学んでいます。学部卒業の進学もよいですが、教員になった後にも、再び母校に帰ってきてくれたらうれしいです。皆さんの学びをサポートしていきたいと思いますので、充実した学生生活を過ごしてください。(終)



埼玉大生たちの先輩でもある内河先生。
あたたかくエネルギーなご指導で、
学生たちを導いてくださっている先生の
これまでの歩み、興味深いお話でした！

埼玉大学マスコットキャラクター メリンちゃん



教育学部生の学びの様子は？ 時間割を紹介します

教育学部の学生たちは、免許取得やその先の教員生活に向けて、一歩ずつ着実に、学び進めています。本学教育学部3年生の2人に、そんな日々の時間割と学生生活の様子を紹介してもらいました。

◆◇^{あやか}佐藤朱夏さん(言語文化専修国語分野3年)◆◇

	月	火	水	木	金
1	漢文学特講ⅡB				
2	ジェンダー論入門		ジェンダー論入門		
3	中等国語科指導法A	国語学概論	国文学概説A	学習指導と学校図書館	近代文学特講A
4	特別支援教育基礎論	幼児教育方法		情報メディアの活用	学校図書館メディアの構成
5		国語教育ゼミ		国文学史概説B	
6	学校経営と学校図書館				



私は、大学4年間の中で小学校教諭の免許に加え、中高の国語、図書館司書、幼稚園一種取得を目指し、日々勉強しています。私の今の夢は「子どもに学ぶことの楽しさ」を伝えることです。埼玉大学教育学部では将来の夢に向けて努力することはもちろん、将来の選択肢を広げることもできます。私は今自分のこの教育の軸を忘れずに、未来の子どもたちに向けてさらに精進していきたいです。(※時間割は2024年度前期)



◆◇^{うしおだはん}潮田帆南さん(言語文化専修国語分野3年)◆◇

	月	火	水	木	金
1					初等英語科指導法
2		図画工作科指導法			国語教育基礎研究B
3	初等家庭科指導法	国文学概説B		古典文学特講B	近代文学特講B
4		中等国語科指導法D			
5		国語教育ゼミ			
6					

私は、教育学部中学校コース国語分野に所属しています。基本的には中学校国語教員になることを目指す専修ですが、小学校の免許を取るための授業も履修しています。ゼミは3年生からで、最初は自分が研究をするなんてと不安な気持ちもありましたが、先輩方、教授方のサポートもあり充実した大学生活を送れています。(※時間割は2024年度後期)



「生徒と歩む」教職の面白さ、英語教育のこれから(谷口拓矢先生)

教職大学院には、埼玉大学を卒業し、さらに専門性を深めるために大学院で学ぶストレートマスターの院生の他に、教員としてキャリアを重ねたのちに、更なる専門性の陶冶のために教職大学院に入学して長期研修を行う「現職教員院生」が在学しています。今回は、そのおひとりである中学校英語科教諭、谷口先生にお話を伺いました。他業種を経て教員となられ、さらに教職大学院で学ぶというキャリアを通った谷口先生ならではの興味深いお話です。中学校英語教育の最前線で何が起きているのかについても、語ってくださいました。

◆語り手: 谷口拓矢(さいたま市立美園南中学校教諭、インタビュー当時は教職大学院教職実践専攻
教科教育教育高度化プログラム言語文化系教育サブプログラム(英語)1年在学)

◆聞き手・構成: 森 薫(教育学部芸術講座音楽分野准教授)

他業種を経てわかる、教員の「裁量の大きさ」と面白さ

———どのような経緯で教職に就かれたのでしょうか。

谷口: 私は大学では外国語学部英語学科に在籍して、そこを卒業して、まず民間に就職したんです。学習塾と法人営業、2つの会社で8年働きました。どちらの仕事も面白かったんですけど、30歳になって、これから考えたときに、昔から教員になりたかったことを思い出して。古い友人がさいたま市で教員をしていて、そのすすめもあって、転職して教員になりました。

———それは大きな決断ですね。教員になられて、民間との違いで驚いたことや、特徴として感じたことはありますか？

谷口: 他業種との違いとしては、教師が持っている「裁量の大きさ」、それが意味すべてかなと思ってます。「こんな指導がしたい」「こんな学級・学校をつくりたい」ということを、初任から自分で挑戦できる、試行錯誤できるわけです。これは本当に楽しいところだなと思ってます。民間では上司の指示や組織のルールが大きいので、これってありえないんです。逆にいえば、だからこそ、教員の仕事は(注: 本人の裁量や判断によっては)際限なくある状態になっちゃう、ともいえるんですが、私は好意的に捉えていますね。

それから、特に初任時は、試行錯誤するなかで失敗したり、間違ったりすることもあるじゃないですか。そういう時にも、素直に謝ればいいし、ベテランの先生や同僚がカバーしてくれる。そういう風土もいいなと私は思ってます。学校の先生って、そもそも人を育てることをしたい人たちだから、若い先生が挑戦することにウェルカムなんですよ。

———そうやって仕事をされる中で、教職大学院に行こうと思われたきっかけは？

谷口: 初めのうちは、日々授業をして、学級経営をして、ハードル

を一つひとつ越えるという感じでした。5年目くらいから、「自分は教師として何を強みとするか？」ということを考えるようになってきて。教科教育、英語そのものをもう1回学び直したいという思いが強くなってきたんですね。それがきっかけでした。



▲ 谷口拓矢先生。豊富な切り口で語ってくださいました。

コロナ禍で大きく変わった英語教育

その先を見据えて大学院へ

同時期に、コロナ禍もあり GIGA スクール構想が本格化して、外国語教育、英語教育のフェーズが変わったと感じました。1人1台端末が手元にあることで、それまで英語教育でできなかったこと、例えばそれぞれが音声を聴いて練習するとか、生徒の発音を AI がチェックするとか、あらゆることができるようになったんです。それを活用するうちに、これからの英語教育がどうなっていくべきかについて考えるようになり、「子どもたちの学びをいかに促すか」ということへの関心がどんどん高まっていきましたね。それで、2校目の中学校に移ったあと数年経って、さいたま市

の長期研修の選考を受けて大学院を受験しました。

———AI が発音チェック！今の英語の授業はそんなことも行われているんですね。入学後の学びはどのように進められましたか？

谷口：色んなところにフィールドワークに行きましたね。各地の授業の他にも、学会発表を観に行ったり、セミナーに参加したり。「子どもたちが主体的である」というのは、具体的にどのような状態なのか、それを教師はいかにして作っているのか、引き出しているのか。そういう視点で各地に学びに出かけて、課題研究を進めました。

「熱中・集中・夢中」で取り組む子どもを育てる！

課題研究を通じた授業の提案

10 月には、検証授業を行いました。中学校 3 年生のディベートの授業です。扱うトピックは比較的身近なものや、文化的なものですね。外国からくる観光客の方に、アニメや漫画をおすすめするとしたら、一番何がいいかというのを 3 人 1 組で考えてディベートするんです。

子どもたちは、英語を使って読む、調べる、書く、まとめる、発表する、と様々なことに取り組み、その過程では思いや思考の自己開示もする。そうしたことに自ら取り組めるようにするには、教師と生徒との信頼関係や、教師による学習環境の雰囲気づくりといった、エンゲージメント(engagement)を引き出す授業デザインが重要になる、ということを研究としてまとめました。

———英語の授業の変貌ぶりに驚きました。課題研究の他に、大学院の授業で印象に残ることはありますか？

谷口：私自身は中学校籍なので、中学の枠組みで学校教育を考えることが多かったんですが、教職大学院では小学校、特別支援学校等の他の校種の先生と出会えて、異なる視点を得られる。それは大きかったですね。

———他校種や他教科の院生たちと交流しながら多角的に学校教育について考えられるのは、教職大学院ならではのですね。充実した長期研修のお話をありがとうございます。では、これから教員になろうとする学生たちにメッセージをお願いします。

谷口：私自身は特殊なキャリアで教職に就きましたが、やっぱりバイタリティある 20 代の時期に、若い感性と熱量をもって子どもたちと関わるというのも素晴らしいな、そういうキャリアもきっと良いよって思うんです。それに、教員になって大変だったことが何かになって考えると……あんまりないんです。

———えっ！？そうなんですか？

谷口：ないというか、教員の仕事は 1 年で区切られていて、どんなに色々なことがあっても、3 学期の終わりには別れがやってくる。1 年の間にどれだけのことが自分にできるだろうって考えて、力を尽くして、終わったらリフレッシュして、心機一転新年度を迎える。そういうところがあるんですよ。

大変だった担任 1 年目…でもそこにすべてが詰まっていた

思い出してみると、最初の担任クラスは大変でした。入学式の日ガラガラッと教室の扉を開けたらもうすごい状態で。これは 1 年大変だぞって思ったら案の定でしたね。生徒同士のトラブルもあったし、自分も若いからカツとなって叱ると、もっと反発があった。



▲ 大学院の授業での
ディスカッション



▲ 課題研究の一環として中学校で行った検証授業



▲ 課題研究最終報告会での発表

2 学期には、職員室から教室に向かうその距離が遠く感じられることもありました。



▲ 院生の交流・研究の場である教職大学院演習室にて

————それは辛いですよね……。どうやって打開されたのでしょうか。

谷口: やっぱりこれはね、生徒がヒントをくれるんです。例えば「先生さ、いつも怒ってばかりだよ、私たちのこと。ほめてくれないよね。」って言われてハッとして、「そうかも」思ったり。それから、担任が若い分、副担任にベテラン中のベテランの先生がいてくださって。「最後は責任取るから、思い切ってやりなさい」といつも見守ってくれたんですね。これが何ととっても大き

かったです。そうやって日々試行錯誤を重ねていきました。

結局 3 年間その学年を担当して、送り出したんです。卒業する生徒から「あの 1 年のクラスが一番良かったよね！」と言われて。「あんなに大変だったのに！？」って思いましたけどね(笑)。子どもたちなりに「楽しい」にも色々あって、色んなことを感じながら過ごしているんだなというのも分かりました。毎日の積み重ねや生徒とのコミュニケーション、他の先生との関わり…最初の 1 年にすべてが詰まっていた、それを抜けたら何とかなるよって、今は思いますね。

「生徒とともに歩む」喜び 教員のやりがいと面白さ

————貴重なご経験・アドバイスをありがとうございます。
最後に、谷口先生にとって、「教員としての喜び」とは何でしょうか。

谷口: 「生徒とともに歩むこと」ですね。最前線にすることがやっぱり一番楽しいです。授業、行事、学校生活全般で生徒に関わることが、教師としての一番の喜びです。生徒に共感したり、時には喜怒哀楽をばつつけあったりするような職業ってあんまりないと思うので。これは本当に面白いんですよ。しかもそういう経験が、生徒の成長につながり、自分の成長にもなっていくんです。

————こちら熱い気持ちになるお話でした！ありがとうございました。(終)

◆◇編集後記◇◆

教育学部言語文化講座国語分野教員の本橋幸康です。埼玉大学教育学部のニュースレター『若芽通信』2 号をお届けします。前号同様に本号では、学部生のキャンパスライフ紹介や現職教員(さいたま市長期研修生)・本学教員のインタビューなど、幅広く教育学部の様子をお伝えしています。ご意見、ご感想を読者アンケートのフォーム(下記に掲載)にて、ぜひお寄せください。

2012 年サイダイコンシェルジェの記事「埼玉大学自慢！あなたが思う自慢できることは？」(<https://www.saitama-u.ac.jp/guide/publicity/concierge/saidaikonsyeruju2012-15.pdf>)というアンケート(食堂で昼食をとる学生 100 名)の第 2 位は「人が優しい」でした。学生や先生方のインタビューを聞いていると、こうした学生の気質は脈々と受け継がれていることを実感します(ちなみに第 1 位は「緑が多い」)。今は桜も散り、緑が豊かなキャンパスになってきました。豊かな季節の変化を感じながら、学生と共に学んでいきたいと思ひます。

◆◇『若芽通信』に声をお寄せください◇◆

ご感想や、今後取り上げてほしいトピックなど、
ございましたらこちらまでお送りください。

URL: <https://forms.gle/hq4iGQgVacbyzTZJ9>



埼玉大学教育学部情報誌『若芽通信』Vol.2

2025 年 6 月発行

編集・発行／埼玉大学教育学部運営企画室

〒338-8570 さいたま市桜区下大久保 255